

「よこはま市民まちづくりフォーラム」はこうつくられた

内藤 恒平 環境創造局環境施設部水・緑管理課

1 市民まちづくり推進担当の誕生

私は93年6月8日、都市計画局の辞令交付式に臨んでいた。「都市デザイン室担当係長」の辞令を渡した都市計画局長は下がるように私に「さて、もう1枚ある」と言い「市民まちづくり推進担当」の辞令を渡した。

この担当は、ヨコハマ都市デザインフォーラム地域展開型事業から、「市民の自主的なまちづくり活動の展開」を目指した「地域まちづくり推進事業」を行うために、新たに設置されたたった一人の担当だった。都市デザイン室の園部弘明さん（94年度は倉知秀朗さん）、網河功さんに一緒に仕事に取り組んでもらうことになった。

地域まちづくり推進事業は、まず、93・94年度の2年間で18区から推薦を受け、都市計画局で選考された18の市民まちづくり活動グループに対し、資金助成や活動支援を行い、その活動の締めくくりとして発表の場である「よこはま市民まちづくりフォーラム」を行うものであった。

さて、まちづくりとは言っても区の推薦を受けた市民のまちづくり活動はさまざまであった。「歴史」、「水と緑」、「福祉」、「魅力づくり・イベント」などさまざまな視点での活動であった。都市計画局が支援するまちづくり活動グループが「福祉」や「イベント」をテーマにするもので良いのかなどの議論もあったが、緑化協定や南区の魅力あるまちづくり等に関わった経験からも「まちづくりは森羅万象だ」という意識を持っていたので、従来の都市計画局の範疇になさそうなものも、できる限りまちづくり活動として重要だと主張し認めた。

横浜市が活動支援を行ってきた23の市民活動グループが集まり、市民による自主的な地域の魅力あるまちづくりを広く紹介し、それぞれの問題点や今後の課題などを話し合おうという「よこはま市民まちづくりフォーラム」は全国で初めての試みだった。93年11月21日にパシフィコ横浜で開催し、市民約1000人の参加で大いに盛り上がった。「よこはま市民フォーラム」の重要事項は学識経験者、市会議員等で構成される実行委員会で決められたが、フォーラムの企画・内容は自主的な活動を行ってきた市民で構成する「企画運営会議」に委ねられた。その会議は市民と行政の互いの立場と考え方を理解しあった協働によって、素晴らしい会議となった。一部だがその秘訣をここに披露しよう。



企画運営会議風景

2 横浜市民まちづくりフォーラム企画運営会議の秘訣

徹底した活動支援：各区で行われるグループの活動に区職員、都市デザイン室の職員が土日も休日も張りついた。決して

でしゃばりはしないが、イベントのアイデア出しも手伝いもする。この徹底したサポートのおかげで市民と行政、相互の信頼感が生まれていった。

最初の会議は懐疑だらけ：活動2年目に入った94年の初夏、23グループに呼びかけて会議を開き、「2年にわたる活動を締めくくるフォーラムを23グループみんなで作り上げよう」といった途端、市民から「役所は一体私たちに何をさせたいのか、なにか魂胆があるのではないか」との厳しい声があがった。私は「行政職員は事務局で、2年にわたる活動報告として皆さんでフォーラムの企画・内容を徹底した議論で決めて欲しい。会議の代表者会議ではなく、23のグループの人なら誰でも参加発言できる会議はどうか」と呼びかけた。そして企画運営会議はスタートした。徹底した自己紹介のあと、会議の議長団も参加した市民3人が交代で行うことやフォーラムのキャッチコピー「このまちしほまでおいしいよ」が数十の候補から選ばれた。このころから毎回40人ぐらいだった参加者がどんどん増え、70人を超えるようになって行く。今度の会議は面白いと評判になってきたらしい。

とことん議論した：フォーラムのすべてを市民の議論で決めた。デザイナーをあきらめさせたがポスターのデザインへの注文だった。全員から子供を高齢者の姿に入れると言うのだ。何しろ当日の進行から会場の配置まですべて。月2回、6ヶ月間、市民約70人が毎回徹底した議論、そして手を上げて採決。また議論、採決。午後7時から終電にならないと終わらない会議。とうとう貸し会議室では時間が収まらないので市庁舎の大きな会議室で会議することになった。別にグループ別の自主会合も数知れず行われたという。

私紹介カード：全員の前で自己紹介をしていると時間がかかるので、自己紹介カード（名前、所属、ひと言）を会議に初参加の人に書いてもらいすぐさまコピーして、必ず全員配布。どこのどんな人かすぐわかるところが好評だった。

司会進行役：参加した市民の中から女性3人の議長が交代で司会した。交代のたびに個性が発揮され新鮮な雰囲気になり、なかなか決着しないと思われた議題もすんなり解決に向かった。

議事録と議題予告：月に2回行った企画運営会議。午後7時から終電までということもたびたびあった。事務局は会議終了とともに徹夜も辞さず議事録を作成。2週間後の次回のために議事録と議題をすぐさま発送。出席者はもちろん欠席者にも必ず配布した。前回議論の内容が良くわかり、次の会議がものすごくスムーズになった。

—横浜スタジアムの朝焼けがきれいだったな—（独白）

コピーつきホワイトボード：議論の内容をボードに書いてすぐコピー。全員に配りまた、議論して決定。情報は的確に全員に行き渡ったおかげで納得の議論ができた。

学生も加わった事務局構成：市の職員3人、コンサルタント2人に加え、デザイナー・コンサルタント、大学助手、大学院生、大学生などの名づけて「グループY」延べ10人が参加。平均年齢20代前半の人たちが事務局を補助した。楽しい雰囲気生まれ、参加者が増え続けたのは「グループY」の功績が大だった。

決戦型投票採決の採用：皆の意見が20～30出る。それを7つに、3つにそして1つに。段階的に絞りながら全員が議論し採決する。これによって、「よりよい選択」が生まれ、結論に納得がいく方法を実践した。